HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	集団を越えた協力に関する実証的・理論的検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	舘石, 和香葉
Citation	北海道大学. 博士(人間科学) 甲第15659号
Issue Date	2023-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90747
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Wakaba_Tateishi_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）　　氏名：　舘　石　和　香　葉

学位論文題名
集団を越えた協力に関する実証的・理論的検討

１）本論文の観点と方法

現生人類であるホモ・サピエンスの登場以前から、Homo 族は小集団で狩猟採集生活を送ってきた。現在、そのような社会生活においては、集団内では相互協力が成立していたと考えられている。それは、集団内では長期間同じ相手と相互作用するため、互恵性が成立しやすいためである。互恵性は 2 つに分けられるが、直接互恵性は、協力行動には協力が、非協力行動には非協力が返されることにより、二者関係の中では協力行動が返報されることを意味する。間接互恵性は三者以上の関係において、協力行動がその相手ではなく第三者から返報されることを意味する。そのためには第三者は自分とは直接関係のない他者の行動を把握している必要があるが、集団内では他者の行動に関する情報が共有されていることが多いため、間接互恵性も成立しやすいと考えられている。しかし、21 世紀の現在、先進国における人類の生活は数百万年にわたる狩猟採集社会とは全く異なる様相を呈している。科学技術の発展により、地球の反対側に住む人とも相互作用することが可能になるなど、実際に人々の相互作用の範囲は自分の所属する小集団にとどまらず、飛躍的に増大した。しかし、集団を越えた相互作用においても集団内の相互作用と同様、相互協力が達成される保証はない。それは、集団の境界を越えては直接互恵性も間接互恵性も成立しにくくなるためである。本博士論文は、このような現代の社会が直面する新たな状況において、相互協力を阻害・促進する要因を理論的・実証的に探る試みである。

２）本論文の内容

本論文は「はじめに」、及び 6 つの章から成っている。第 1 章が背景、第 2 章が通常の序論、第 3 章が集団を越えた協力を阻害する要因についてのシナリオ実験及び実験室実験による検討、第 4 章は集団を越えた協力が阻害される可能性についての理論的検討、第 5 章は集団を越えた相互作用を促進する要因に関する比較社会実験、そして最後の第 6 章は総合考察となっている。以下、各章の概略を述べる。

「はじめに」で本論文を貫くテーマの導入がなされ、問題設定と本論文の構成が示された後、第 1 章では、本論文で扱う根本問題として、協力問題とは何かが提示される。まず社会的交換や協力行動などの用語の定義がなされ、生物学における協力行動の説明原理が紹介される。そして、近年急速に注目を集めつつある評判に関する研究が紹介される。

第 2 章では、社会心理学を中心とする領域で研究されてきた内集団ひいき現象についての紹介がなされ、本研究の問いである、集団を越えた協力を阻害・促進する要因の候補が複数提示される。そして、続く 3 つの章についての予告がなされる。

第 3 章は、集団を越えた協力を阻害する要因を実証的に検討する 3 つの研究から成っている。これらは全て、集団を越えて協力する普遍主義戦略を採用する人と、集団内でしか協力しない内集団ひいき戦略を採用する人が、どのような評判を獲得するのかを検討するものである。操作された要員は集団間競争の有無である。実験 1 はシナリオ実験であり、自分と同じ集団に属する 2 人の対象人物が内集団成員と外集団成員に資源を分配する状況を設定し、彼らをどのように評価するかを回答者に尋ねた。実験 1A では内集団成員と外集団成員に平等に分配する普遍主義戦略、実験 1B では平等かどうかに関わりなく、集団を無視して分配額を最大化する普遍主義戦略を設定した。その結果、どちらの普遍主義戦略でも、それを採用する対象人物の方がよりポジティブに評価されることが示された。これに対し、実験 2・3 では実際に参加者が相互作用を行う実験室実験を行った。その結果、集団間で競争がある場合に限り、集団を越えた協力は集団内での評判を低下させる可能性が

あることが示された。

第 4 章は、数理モデルを用いた理論研究である。ここでは、進化ゲーム理論に則り、全員が普遍主義戦略を採用している均衡が崩壊する要因を理論的に検討している。先行研究では普遍主義均衡は内集団ひいき均衡と比較して頑健であるとされていたが、無条件に協力する戦略が存在する場合、及び集団外では非協力される可能性が高い場合には、普遍主義均衡は崩壊しやすくなることが明らかにされた。この結果は、普遍主義均衡が予想されていたよりも脆弱であることを示すものである。

第 5 章では、視点を変えて、集団を越えた相互作用を促進する要因に焦点が当てられている。集団外の他者と相互作用することにより大きな利益を得られる可能性があるが、逆に搾取されて大きな損失を被る可能性もある場合、集団内に閉じこもっていた人々が集団外へ出て行くことを促進する要因として、一般的信頼が取り上げられている。これは他者一般が信頼に値するという信念であり、北米と東アジアで大きく異なるということが先行研究により示されている。そこで、日本とカナダで機会コストを操作した同一の実験室実験を行い、集団外へ出るタイミングに社会差が見られるかどうか、そして見られる場合は一般的信頼の差によりそれが説明されるかどうかを検討している。結果は、一般的信頼には予想に反して日加差は見られず、集団外へ出るタイミングにも日加差は見られなかった。しかし、理論的に予測されたとおり、一般的信頼が高い参加者の方がより早く集団外へ出るということが示された。

最後の第 6 章は総合考察であり、本論文の意義と限界、そして将来展望についての議論がなされている。本論文で明らかにされたことは、以下の通りである。まず、本研究では集団を越えた協力を阻害する要因として、そのような行動が集団内での評判を低下させる可能性に着目した。これについては、実証研究により、集団間の関係性に依存することが示唆された。集団間に競争があるときには、普遍主義戦略を採用した対象人物に対する評価は内集団ひいき戦略を採用した対象人物と比べて低かったが、競争がないときには同程度であった。従って、集団を越えた協力が生じにくいのは集団を越えた協力行動自体が集団内で低く評価されるからであるという可能性はそれほど大きくはないと考えられる。理論研究からは、普遍主義均衡の安定性が従来考えられていたよりも低いこと、むしろ内集団ひいき均衡の方が頑健であることが示された。このことは、集団を越えた協力の達成はやはり困難であることを示唆している。最後に、この予想以上に困難である集団を越えた協力を促進する要因として機会コストと一般的信頼に着目し、比較社会実験を行った結果、社会間比較に関しては差が見られなかったものの、一般的信頼が高い参加者の方がより早く集団外へ出ることが示された。このことは、これまでの集団を越えた協力を扱う理論研究には欠けていた、機会コストという概念の重要性を改めて示唆している。今後は、この要因を考慮した理論研究や、集団を越えた協力行動の社会差を包括的に説明する原理を追求する研究が望まれる。